

天文学とプラネタリウム

第43回



今月のお題

マルチリンガル・アストロノミー



博士論文執筆に追われる著者。論文逃避(!)に考えついたのは…
星を通じて国際交流!?



www.tenpla.net

高梨直紘 (東大D3/天文学教育研究センター所属)

平松正顕 (東大D3/国立天文台ALMA推進室所属)

観測や研究会などで海外に行くと、いつも気になるのは現地の天文事情です。天文雑誌を立ち読みしたり、新聞記事に天文の記事がどんな風に紹介されているのかチェックしたり、現地の人にどんな星が好きか聞いてみたり、天文学者に会えばなんで天文学者を目指したんですかと聞いてみたり。海外に行かずとも、たまたまなにかの機会で外人さんと知り合うと、宇宙ってどうよ?と聞いてみたりします。世界の人々が天文学を、宇宙をどのように楽しんでいるのかが気になるのです。毎回毎回、飽きずに同じ事を聞くわけですが、そこには面白い発見が少なからずあるものです。

例えば、北海道に出張した際に知り合いになったネパールの青年曰く、「ネパール人は星の名前を知らない」。よくよく聞いてみると、カースト制度の名残で、星占いに関わることが許される上位カーストだった人々しか星の名前について知ることが許されていない、との事でした。この話がどの範囲にまで適用できるのかはわかりませんが、結構、衝撃じゃありません?

このような話を聞くと、もっともっと色々な話を見聞きして、私たちの“常識”にはない星

との付き合い方を知りたくなるというものです。また、星を共通の話題にして様々な人と交流を深めること自体も、楽しいものです。このような機会を、もっとたくさん作れないものでしょうか。

マルチリンガル天体観望会

そこで目を付けたのが天体観望会。日本各地で行われていますが、日本語以外の言語でも対応しているものはほとんど聞かないようです。英語なら、まあなんとなく対応できるでしょうが、英語以外の言語、例えば中国語、韓国語、あるいはスペイン語といった日本でも耳にすることの多い言語に対応できる観望会は皆無と言って良いでしょう。宇宙の話に国境はないと思いますので、もっと外人さんに積極的に開かれた観望会があっても良いのではないのでしょうか。

問題は、どうやって多言語に対応するかですが、最初は地元の外語専攻の学生さんや留学生、外国語サークルなどの方に通訳をお願いするというのが良さそうです。外人さんの中にも星好きな人も少なくないでしょうから、お客さんと



かつて東大本郷で行われた「弥生観望会」の様子。
大学の施設なら留学生を捕まえるのにもってこい…?

して参加された外人さんが後々ボランティアとして参加してくれるようになれば万々歳です。色々な言語での説明ノウハウが貯まれば、観望会の運営側でそれを共有するのも良いでしょう。

このような機会を通じて交流を図ると共に、いろいろな言語文化での星の名前や、伝承なども収集できればきっと面白いのではないのでしょうか。2006年の統計によれば、200万人以上の外人さんが日本には滞在しています。これからますますその割合は高まっていくと思われますが、それに先駆けてみんなで宇宙を楽しむ場を作り出せると良いなあと思う今日この頃です。